

地域や世界とのつながりを土台に、 教育活動の持続的な発展を目指す

福島県立ふたば未来学園中学校・高校

東日本大震災の被災後に地域の教育の復興を目指し、2015年度に開校した福島県立ふたば未来学園中学校・高校。被災によって顕在化した多様な課題に取り組もうと、地域や世界とのつながりを学びに生かしながら、教育活動を絶えず進化させていくことを目指している。

福島県立 ふたば未来学園 中学校・高校 プロフィール

◎中・高6年間を通して地域の問題解決に主体的に取り組めるよう、高校は2015年度、中学校は2019年度に開校。理念として「自立」「協働」「創造」を柱に据えた「変革者たれ」を建学の精神に掲げ、グローバル・リーダーの育成を目指す。

校長 柳沼英樹先生
生徒数 中学校約180人、高校約430人 学級数 中学校6学級、高校15学級
電話 0240-23-6825



建学の精神「変革者たれ」 に込めた思いとは

東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所（以下、原発）の事故により甚大な被害を受けた福島県双葉郡。地域の子どもは、一時的な就学中断や避難先への転校など、生活・学習環境の変化を余儀なくされた。そうした中、双葉郡8町村の教育長が中心となり、地域の子どもの学びを守り、未来を生きる強さを備えた人材の育成を目指して、2013年に県立中高一貫校の設置を柱とする「福島県双葉郡教育復興ビジョン」を策定した。

2015年4月には、福島県立ふたば未来学園高校を開校。防潮堤用に土を掘り出した跡を整地した場所に新校舎を完成させた2019年4月には中学校も開校し、併設型中高一貫校としてスタートを切った。

建学の精神「自らを変革し、地域を変革し、社会を変革する『変革者たれ』」に込めた思いについて、福島県教育委員会の県立高校改革室室長

として、同校の設立準備に携わった柳沼英樹校長は、次のように語る。

「双葉郡では、人口減少や少子高齢化、産業空洞化、地域コミュニティの弱体化といった多様な課題が、震災や原発事故により顕在化しました。そこで、中・高6年間を通して、地域の問題解決に主体的に取り組むとともに、グローバルな視点で考え行動できる力を養い、地域、そして日本や世界を変革できるリーダーを育成することを、学校の使命に掲げました」

避難先から戻れない地域住民が多いことから生徒数の確保が危惧されたが、ふたを開けてみると、中・高ともに募集定員を大幅に上回る志願者が集まり、同校に対する期待の大きさがうかがえた。

「避難先を転々とし、転校を繰り返す中で、本来の力を発揮できない子どもや、心のケアが必要な子どもが多くいました。そうした厳しい状況にもかかわらず、『故郷の復興を担いたい』と避難先の親元を離れて入寮し、通学する生徒もいます」（柳沼校長）

お話を聞いた方



校長
柳沼英樹
やぎぬま・ひでき

福島県教育委員会高校教育課県立高校改革室室長等を経て、2020年度から現職。

地域を舞台に 探究的な学びを深める

同校のカリキュラムは、「実践力をみがく『未来創造学』」「世界に飛び出す学び」「深い学び・高い学力」「未来の主人公となる学び」の4つの学びを有機的に結びつけている（図1）。

カリキュラムの中心となる「未来創造学」は、現実社会での問題解決の実践と、自らの生き方の探究を結びつける学びであり、「総合的な学習の時間」に取り組んでいる。学びの出発点となるのは、中学校入学後すぐの時期に、バスで地域を回り、地域の人々から話を聞くフィールドワークだ。

「双葉郡の外から入学する生徒もいるので、最初に地域の様子を見て回ります。そこで地域の復興と活性化に取り組む魅力あふれる大人たちに出会う中で、生徒それぞれに問題意識が芽生え、自分に何ができるかを考えるようになります」(柳沼校長)

「未来創造学」では、各生徒が双葉郡の特定の町村を選択してフィールドワークや住民への聞き取り調査を実施する(写真1)。自然との共生や地域おこし、少子高齢化対策など、多様な観点から地域と連携した問題解決に取り組んでいく。その過程では、国語科と連携してレポート作成の指導を行うなど、各教科で学んだ知識の活用を図り、教科学習との往還による深い学びを生み出すことを強く意識している。

中学校3年間の活動の成果は、地

域住民らを招いた発表会で発信。そして、高校では「未来創造探究」として福島や世界の課題へと発展させ、さらに探究や実践を深めていく。

地域と世界を往還して考え、行動できる資質・能力を重視

同校では、地域と世界の課題を結びつけて捉えられるグローバル・リーダーの育成を目指し、「世界に飛び出す学び」にも力を注ぐ。

「片足を地域に置き、もう片足を世界へと伸ばす教育活動を重視しています。地域で学んだことを世界に、そして、世界で学んだことを地域に還元できる人材の育成が、地域貢献につながると考えています」(柳沼校長)

「世界に飛び出す学び」の1つが、通常の英語の授業に加えて行う授業、



写真1 「未来創造学」では、フィールドワークで地域の鮭の加工会社を訪れ、復興に尽力する社員の思いを聞いた(2019年7月撮影)。

「グローバル・スタディ科」だ。「CLIL(内容言語統合型学習)」*1を活用し、少人数での授業を実施。ネイティブのALTと、地域や世界の課題について議論したり、自分の考えを英語でプレゼンテーションしたりと、多様な活動を通じて、会話や討論、発表などの実践的な英語力を育成する。

中・高を通して複数回の海外研修の機会を設けるなど、国際的な視野

図1 中学校における特色ある4つの学び

学び	教育活動例	内容	育成する資質・能力
実践力をみがく 「未来創造学」	・未来創造学	地域を学習フィールドに、福島の歴史・伝統・文化を学びつつ、地域の「ひと・もの・こと」とのかかわりを通じて、自らの生き方を探究。教科学習と往還して、深い学びの実現を目指す。	・思考力・協働力・マネジメント力・能動的市民としての社会的課題への関心
世界に飛び出す 学び	・グローバル・スタディ科 ・海外研修	「CLIL」を活用した授業で英語4技能の能力を育む。海外からの来訪者も積極的に受け入れ、日常的な異文化コミュニケーションを通じて、グローバルな見方や考え方を育成する。中・高を通して複数回の海外研修を実施予定。	・実践的英語力 ・グローバルな視野と異文化コミュニケーション能力
深い学び・ 高い学力	・各教科でのアクティブ・ラーニング ・習熟度別学習 ・国語・数学の時数増	各教科で主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の授業を展開し、様々な場面で知識を活用して深く思考できる力を育む。国語・数学・英語の授業では少人数指導を行い、中・高の教員が連携したチーム・ティーチングも導入。国語と数学は授業時数を多く設定して、高い学力の育成を図る。	・数学的思考力 ・読解力 ・論理的思考力
未来の主人公 となる学び	・哲学・熟議	答えが1つとは限らないテーマについて、車座になって語り合い、物事の本質を追究し、価値の多様性を学んでいく。	・創造性 ・表現力 ・コミュニケーション力 ・自己・他者理解と豊かな人間性 ・リーダーとしての資質・能力
	・リーダー学	政治家の小泉進次郎氏など、世界で活躍する各界の「変革者」の方々を定期的に講師に招き、小グループでの対話も行いながら、講師の志や生き方を学び、リーダーに求められる資質を高める。	
	・演劇・コミュニケーション	劇作家の平田オリザ氏など、プロの劇団スタッフを講師として招き、演劇のワークショップを行う。	

※ふたば未来学園中学校・高校の提供資料を基に編集部で作成。

* 1 Content and Language Integrated Learning の略語。他教科等の学習内容と言語(英語)の両方を結びつけて学ぶ学習方法。

を養う教育活動も重視する。2021年度は、中学3年生がニュージーランドを訪問し、現地の中学生に「未来創造学」の成果をプレゼンテーションする活動などを計画中だ。

建学の精神である「変革者たれ」を体現するためには、身の回りや社会の課題を人任せにせず向き合い、自ら能動的に考えて動くことが欠かせない。そうした資質・能力の育成を図るのが、「未来の主人公となる学び」だ。

その1つとして、「特別の教科 道徳」の授業で実施する「哲学・熟議」では、「友情と愛」「生と死」「権利と責任」といった日常生活に関連する問いや、地域の課題に関する問いなど、唯一の正解がなく、意見が分かれるテーマについて生徒が車座になって語り合う（写真2）。物事の本質を追究し、立場の違いによる考え方の違いを知り、様々な立場への理解を深め、価値の多様性について学んでいく。

ある授業では、多くのテーマに通底する「家族って何？」という問いが生徒から出され、哲学対話を進めた。最初は思いを言葉にできなかった生徒たちが、次第に自分の家族について客観的に捉え直して考えたり、内面的な思いを言語化したりして、

学びが深まっていく様子が見られた。

「外部講師をファシリテーターとして招き、時には私も対話に加わりませす。生徒は、対話を通じていろいろな考え方や立場があることに気づいていきます。そして、互いに納得できる一致点を見いだそうと粘り強く話し合うなど、とても熱心に授業に取り組んでいます」（柳沼校長）

「演劇・コミュニケーション」も、「未来の主人公となる学び」における特徴的な教育活動だ。プロの劇団スタッフを講師に招き、仲間と協働する活動や、身体を使った表現活動、演劇における場面設定や心情の動きを体感するワークショップを実施している。そして、地域の課題などをテーマとした演劇をグループごとに創作して発表し合う（写真3）。

「グループで話し合ってゼロの状態から演劇を創り出していく過程を通じて、自己・他者理解やコミュニケーション力、創造性、表現力などが、驚くほど向上します」（柳沼校長）

ルーブリックで資質・能力を評価し、成長に結びつける

これらの多様な教育活動を生徒一人ひとりの成長に結びつけられるよ

う、4つの学力概念「知識」「スキル（知識をどう使うか）」「人格（社会とどうかかわるか）」「メタ認知（自らを振り返り変えていく力）」に基づき、11の資質・能力を明示。それらをバランスよく育成することを目指し、資質・能力ごとに5段階の到達度を示したルーブリックを作成し、それを基に指導を行っている。

中学1年生の初めには、「変革者とはどのような人間像なのか？」をルーブリックに基づいて考え、建学の精神を具体化して理解する時間を設定。そして、定期的に行う自己評価や教員との面談などで、自身の成長を振り返って課題を見だし、「未来創造学」やその他の学習活動における今後の目標を設定する。

ルーブリックは中・高共通で使い、6年間で1つの軸で自己評価することで、自身の成長を自覚しながら着実に成長していく姿が見られるという。

「自己評価の内容を見ると、多くの生徒は、学年が進むにつれてメタ認知能力が着実に向上しているのが分かります。生徒の成長を的確に映し出せるように、ルーブリックは毎年、生徒の実態や学習内容などに合わせて見直しています」（柳沼校長）

社会での自身の役割を見つけ自らキャリアを形成していく

変革者の育成を目指す教育活動を通じて、生徒の中には地域や社会のために自分の力を生かしたいといった強い目的意識が育まれているという。

「これは高校生の話ですが、入学当初は将来の目標を具体的に持っていなかったのに、地域のために働く大人たちに出会う中で、自分も何か地域の役に立ちたいと考えるようになった生徒がいました」（柳沼校長）



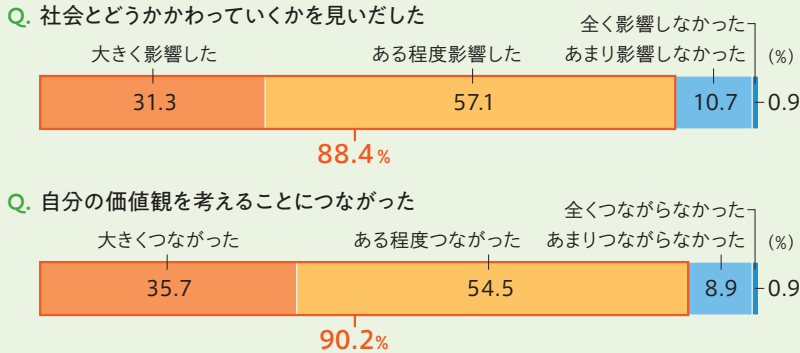
◀写真2 「哲学・熟議」では、次の発言者にボールを渡して話者を変え、対話をつくり上げていく。自分と異なる意見に接して、自己や他者を見つめ直す機会となっている（2020年2月撮影）。



▶写真3 「演劇・コミュニケーション」では、仲間と協働して創作活動をしたり、身体を使って心の動きを表現したりするなど、様々な要素が成長を支え、豊かな人間性を育てている。

図2 高校卒業時の生徒へのアンケート調査の結果

調査結果には、同校での学びを通じて、約9割の生徒が自身の将来像を見だし、地域や社会に貢献していきたいという明確な目的意識を持つようになったことが表れている。



注) 2021年3月に高校を卒業した生徒113人を対象に、2021年2月末に行ったアンケート結果より。
※ふたば未来学園中学校・高校の提供資料を基に編集部で作成。

その生徒は、出身地の双葉郡富岡町の名所「夜の森桜」の魅力と同世代の人たちにも知ってほしいと、タピオカに牛乳と桜のフレーバーを加えたドリンク「さくらタピオカ」を考え、町内のカフェで販売。購入者に配る缶バッジに「夜の森桜」の動画にアクセスできる2次元コードをつける工夫もした。そして、高校卒業後も地域振興に取り組みたいと話しているという。

「フィールドワークで地域の大人と話す機会の多い中学生にも、この生徒と同じような変化の萌芽を感じます。この地域には、まちの復興を支える多くの方々があります。そうした輝く大人の姿に直接触れることで憧れが芽生え、自分も輝く大人になるために今、何をすればよいかを考え、生き方を変化させるといった好循環ができています。本物に触れるからこそ、生徒は大きく意識を変えていくのだと思います」(柳沼校長)

上級生の姿に刺激を受けて、変化する生徒もいる。「未来創造学」でのプレゼンテーションは、他学年の生徒も見学できる。堂々と意見を述べ

る上級生の姿を見て、意識が前向きに変わる生徒も多い。

地域と深くかかわる活動は、高校でも「未来創造探究」として継続される。そうした活動を通じて、「将来は、福島第一原子力発電所の廃炉作業に携わりたい」と、原子力工学を学ぶ大学院を目指す生徒、探究学習で地域の高齢者にお世話になったことから高齢者施設に就職した生徒など、自身の将来像が具体的になり、自らキャリアを形成する姿も見られる。

2021年3月に高校を卒業した生徒へのアンケート調査では、「社会とどうかかわっていくかを見いだした」の肯定率は88.4%、「自分の価値観を考えることにつながった」の肯定率は90.2%に上った(図2)。

多様な関係性を生み出して 持続可能な教育活動を構築

同校では、今後も地域を始めたとした多様なつながりを充実させ、教育活動の持続的な発展を目指していく。

その拠点となるのが、地域との交流や学習成果の発信などの場である

地域協働スペース「双葉みらいラボ」だ。学校図書館に隣接する専用スペースに、カフェとともに設けられ、生徒や教員はもちろん、地域や企業など、様々な立場の人が自由に集える場として開放。認定特定非営利活動法人カタリバ^{*2}のスタッフが常駐し、運営をサポートしている。

開放的な空間では、中・高生や大学生、社会人の間に多様な「ナナメの関係」が自然と生み出されている。放課後、中・高生にカタリバの大学生スタッフが勉強を教えたり、中・高生と地域住民が地域の問題について語り合ったりする姿も見られる。

「開校以来、本校の教育はまさに地域の人々に支えられながら、発展してきました。今後もそうした関係性を充実させることで、教育活動が進化していくと考えています。ただ、関係性の構築を教員だけに頼っていると、活動は限定されやすくなります。より多様な人々が集い、つながりを深められる工夫をすることで、持続可能な教育活動をつくり上げていきます」(柳沼校長)

そのためには、教育委員会との連携をより強固にして、理想の教育を追い求めていく考えだ。

「これまで県や各町村の教育委員会から、予算や人材など、多くの面で支援と協力を受けてきました。学校の多忙化やコロナ禍により、実施が難しい場面もありますが、大切なのは理想を追い求めることだと思います。目の前の生徒をしっかりと見つめ、『こんな学びを実現したい』という思いをすべての教員や教育委員会と共有し、その実現に向けて今できることを着実に行う。それが、どのような状況においても、学びの質を高め続けていくために大切だと考えています」(柳沼校長)

*2 大学生スタッフが高校を訪れ、生徒一人ひとりと対話し、将来を考えるきっかけを提供するキャリア学習プログラム「カタリ場」などを運営する団体。